キラリ！輝く人たち

「神楽士として恥じぬよう」

左：平山　広美さん（大和田）
右：中村　理恵さん（関戸）

五穀豊穣と家内安全を祈願し、神前に奉納する磐戸神楽。江戸時代の宝暦10(1760)年から約260年もの間、大和田に住む男性によって伝承されてきた神事です。

昨年、長い伝統の中で初めて女性の神楽士が誕生し、伝統文化に新たな風が吹きこまれました。4月2日に奉納する神楽の練習に励む二人にお話を伺いました。

伝統文化を継承するために

神楽の始まりは、五穀豊穣等を願って近隣の神官たちが中心となり鷲宮神社(埼玉県久喜市)で神楽を習得し、地域の神前で奉納をしたことだと伝えられています。

明治時代になると神官による継承が難しくなりましたが、農家の長男が受け継ぎ、毎年絶えることなく神楽を奉納してきました。

近年は、神楽の後継者を確保することが非常に難しくなり、男性に限らず加入することを検討してきましたが、伝統を「守る」か「継承する」かで意見が分かれ、女性の加入には時間がかかりました。

しかし、磐戸神楽保存会の関根会長を中心とした粘り強い話し合いが実を結び、昨年初めて女性神楽士が誕生しました。

神楽は特別なもの。緊張感が違う。

伝統継承の候補者として白羽の矢が立ったのは、大和田囃子会で活動していた平山広美さんと中村理恵さんでした。

子どもの頃からお祭りが大好きで、おはやしには特に憧れていた二人。小学校のPTA役員に就いたのがきっかけで、大和田囃子会に誘われ、10年以上のキャリアを持っていました。

「神楽でのおはやしは楽譜やマニュアルがなく、見たり聞いたりして覚えなければならず、最初はすごく戸惑いました。神楽が持つ神聖な雰囲気は緊張感が全然違うので、ドキドキの連続でした」と笑いながら話します。

伝統に恥じないように練習を

太鼓(代拍子)や、しの笛のおはやしは4拍子や8拍子とも違う独特なもの。「分からないことは、積極的に先輩に聞くようにしています。そうすれば、理解できるまでしっかりと教えてもらえるんですよ」と話す顔は真剣そのもの。

今年からは、おはやしだけではなく「舞」にも挑戦することになりました。普段と違うゆっくりとした動きの連続なので、練習後は必ず筋肉痛になってしまうとのこと。

平山さんと中村さんは「12座」ある舞の中の「2座」を披露します。伝統文化を継承する熱い思いを持った二人から目が離せません。

※10月中旬開催予定の「さんさんまつり」でも披露されます。

▶しの笛を吹く平山さん

◀代拍子をたたく中村さん